様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　４ 日現在

機関番号：３２５１７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ００２８６

研究課題名（和文）百韻・千句資料における紹巴の連歌文芸の研究

研究課題名（英文）A Study of Joha's Hyakuin and Senku Renga Works

研究代表者
松本　麻子（Matsumoto, Asako）

聖徳大学・文学部・教授

研究者番号：７０７０８９９０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、連歌師里村紹巴の出座した連歌百韻および千句を整理し、その文芸活動について明らかにしようとするものである。紹巴の百韻・千句は未翻刻のものが多いため、特に重要だと思われる資料を翻刻し報告書にまとめた。百韻・千句を調査した結果、紹巴は昌叱や心前ら親しい連歌師たちと常に同座し、行き様をコントロールしながら連歌会の迅速化をはかっていたことがわかった。自身が目立つ句を詠むのではなく、誰もが理解できる句を詠むようにし、連衆を楽しませるよう努めていたと言える。結果として、連歌に関わる人口が増加した。そして、紹巴が整えた会席の形式や句の詠み様が、後の俳諧に影響を与えたことも本研究で判明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
紹巴は前の時代の宗祇や早世した宗養と比較して、詠まれた句は芸術性が低く、連歌文芸を衰退させた者と指摘されていた。しかし、一方で、紹巴が近世初期の俳諧に与える影響は多大で、『連歌至宝抄』や『連歌新式増抄』など、多くの連歌関係書が近世初期に次々と刊行されている。では、なぜ連歌作者として評価されなかった紹巴が、600近くの百韻や千句を残し、彼の著作も広く読まれたのか。この点を明らかにすることは、連歌から俳諧の道筋を明らかにできるものである。さらに、日本の文学史を理解する上でも、重要な視点だと思われる。

研究成果の概要（英文）：This study attempts to shed light on the literary and artistic activities of renga master Satomura Joha by organizing the hyakuin and senku renga works that he composed. Since many of Joha’s hyakuin and senku renga have not yet been reprinted, we compiled and reprinted the materials we believe were particularly important in this report. Our investigation of the hyakuin and senku renga revealed that Joha would always sit together with Shoshitsu and Shinzen, the renga masters he was close to, aiming to control the way they worked and streamline the rengakai (gatherings of renga poets where renga poetry was typically composed). Rather than composing poems that would have made him stand out, he seems to have tried to compose poems which everyone could understand and would entertain the rengakai participants. This resulted in popularizing renga. The study also found that the meeting format and style of verse composition established by Joha influenced the later haikai.

研究分野：日本文学

キーワード：中世　連歌　紹巴　昌叱

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

## １．研究開始当初の背景

本研究は、連歌師里村紹巴の百韻・千句について研究を行うものである。紹巴は島津忠夫が紹巴時代を連歌の「固定」期と位置づけ「連歌の終焉に大きくつながるもの」（『連歌史の研究』、1969 年、角川書店）と指摘したように、これまでその作風は評価されてこなかった。一方で、廣木一人は、「紹巴の著作は重視され、その連歌学書『連歌至宝抄』は古活字版で刊行されて以来、製版でたびたび刊行され、（中略）宗祇の足下にも及ばないとされながら、近世二百数十年、その血筋が連歌を支え、その連歌創作の方法が連歌界を支配したと言えるのであろう。さらに貞徳という門弟を育て、俳諧の系譜にも大きな地位を占めた」（「里村紹巴の連歌」、「国文学　解釈と教材の研究」51－11、2006 年 10 月）と指摘する。宗祇時代と比較して、連歌が衰退していたとしたら、なぜ紹巴はこのように評価されたのか、という疑問は研究開始当初は明らかにされていなかった。

## ２．研究の目的

本研究は、紹巴の出座した連歌百韻および千句を整理し、紹巴の文芸活動について明らかにしようとするものである。紹巴は生涯 600 近い連歌会に出席したとされる室町を代表する連歌師であるが、現在は 180 程度の百韻・千句しか紹介されていなかった。そのほとんどは国際日本文化研究センターの連歌データベースに収められるものだが、表記はすべてひらがなであり、連衆の名前は掲載されず、研究の際には原本を確認しなければならない。そこで、①現存する紹巴の参加した連歌の資料を年代順に整理し、②紹介されていない重要な百韻は翻刻し、③紹巴と会席を共にした連衆の一覧を作成したい。さらに①～③の基礎調査をもとに、紹巴の文芸活動を明らかにしたい。つまり、紹巴の連歌作品を年代順に見渡し連歌表現の特色を明確にし、室町末から近世初頭にかけて紹巴を取り巻く人々との文芸交流の様相を知ることを、本研究の目的とする。

## ３．研究の方法

本研究は、以下のように進めた。

**【平成３０年度】**

『連歌総目録』をもとに、紹巴が出座した連歌百韻・千句連歌一覧を作成し、国文学研究資料館にて、連歌資料がマイクロフィルムとして保管されているかどうかを調査した。宮内庁書陵部にある紹巴と智仁親王を含めた堂上の連歌懐紙、約 80 枚を翻刻した。書陵部の懐紙を整理し、智仁親王と同座している連衆一覧を作成した。国文学研究資料館・国立国会図書館・国立公文書館・肥前島原松平文庫等の機関に出張し、所蔵されている百韻資料の書誌調査と写真撮影を行った。国立公文書館内閣文庫に所収されている紹巴の百韻連歌については、そのすべての翻刻を終えた。

**【平成３１年度】**

国文学研究資料館・国立公文書館・国会図書館にて、紹巴の連歌資料について引き続きマイクロフィルムの有無を確かめ、複数の本が存在するものは諸本調査を行った。特に永禄 6 年（1563）以降の重要な百韻の翻刻を行った。しかし、今年度 3 月に予定していた、数日間を要する調査、具体的には、大阪天満宮文庫・島原松平文庫の連歌懐紙の調査や早稲田大学図書館蔵伊地知文庫の 連歌資料の基礎調査（書誌調査と写真撮影）に関しては、新型コロナウィルスの影響で実施できなかった。各所蔵機関・図書館が閉鎖されていたため、調査が叶わず次年度に積み残す結果となった。特に、大阪天満宮文庫の連歌懐紙については、国文学研究資料館にマイクロフィルムもないものが多く、進捗に影響が出た。

**【令和２年度】**

国文学研究資料館・国立公文書館・国会図書館にて、紹巴の連歌資料について引き続きマイクロフィルムの有無を確かめ、複数の本が存在するものは諸本調査を行った。しかし、今年度も前年度と同様、予定していた数日間を要する調査、具体的には、大阪天満宮文庫や天理図書館を中心とした連歌懐紙の調査（書誌調査と写真撮影）に関しては、新型コロナウィルスの影響で実施できなかった。各所蔵機関・図書館が閉鎖されていたこと、そして調査可能な時期が緊急事態宣言になり、出張ができなくなってしまったことによる。いずれも、次年度に積み残す結果となった。

**【令和３年度】**

新型コロナウィルスの影響は続いていたが、国文学研究資料館・国立国会図書館・国立公文書館・肥前島原松平文庫等の機関に出張し、また、公開されているデータベースを使用して、紹巴の百韻 250 あまりを調査し、紹巴と連衆との関わりや行き様などについて考察した。4 年間の研究成果を調査報告書にまとめ、報告書を作成した。また、4 年間で得た成果について、令和 4 年 5 月に行われた中世文学会で報告を行った。

## ４．研究成果

本研究の研究成果については、次の通りである。

【平成３０年度】
肥前島原松平文庫蔵の紹巴の出座した千句連歌、「石山世尊院千句」の翻刻を行い、「いわき明星大学研究紀要 人文学・社会科学・情報学篇 第 4 号（通算 32 号）」に掲載した。紹巴の連歌についてもその特色を調査し、「紹巴連歌の特長」と題して「日本文学研究ジャーナル 第 8 号」(古典ライブラリー)に論文を掲載した。

【平成３１年度】
紹巴と昌叱の両吟千句である『毛利千句』の表現研究と、国立公文書館内閣文庫の『百韻連歌集』について伝本調査を行った。『毛利千句』に見える紹巴の連歌表現の特色をまとめ、前年度に考察した百韻における紹巴の特色と比較した。『百韻連歌集』は、38 の連歌百韻を集め書写した書である。これらの百韻は、宗養・紹巴時代の連歌を中心としたもので、特に紹巴の参加した百韻は未翻刻のものが多い。そこで、紹巴の出座した百韻を翻刻し、「国立公文書館内閣文庫蔵『百韻連歌集』の翻刻と解説（一）」(「医療創生大学研究紀要 人文学・社会科学・情報学篇」第 5 号、2020 年 2 月)、「国立公文書館内閣文庫蔵『百韻連歌集』の翻刻と解説（二）」(「医療創生大学大学院人文学研究科紀要」第 17 号、2020 年 3 月）として発表した。

【令和２年度】
前年度に続き、『百韻連歌集』の調査を実施し「国立公文書館内閣文庫蔵『百韻連歌集』の翻刻と解説（三）」(「医療創生大学研究紀要」第 1 号〈通算第 34 号〉、2021 年 2 月）として発表した。連歌発句に関する研究も実施した。紹巴が永禄 10 年（1567）富士一見のために駿河まで旅をした記録『紹巴富士見道記』に注目し、連歌の発句が後の俳諧における地発句（付句を想定していない独立した発句）のような形式となった背景を探った。紹巴以降の連歌について調査し、本研究の最終目的にあたる「近世初頭にかけて紹巴を取り巻く人々との文芸交流の様相を知る」の一端を明らかにしたものである。

【令和３年度】
紹巴を継いだ昌叱の千句「肥前島原松平文庫蔵『文禄五年九月四日千句』の翻刻と解説」(「聖徳大学大学院言語文化学会 言語文化研究」第 19 号、2021 年 12 月）をまとめ、前年度まで発表した百韻・千句資料に、国立公文書館内閣文庫蔵『百韻連歌集』所収の百韻を新たに加えて報告書を作成した（2022 年 3 月)。

【4 年間の研究期間で得た成果】
本研究では、室町末から近世初頭にかけて紹巴を取り巻く人々との文芸交流の様相を知ることも目的としていた。紹巴の百韻・千句を調査した結果、得た結論は次の通りである。紹巴は常に心前や娘婿の昌叱、子の玄仍といった近しい者たち数名と共に連歌会に参加しており、百韻の紹巴らの句を合わせると 40%近くを占めていることがわかった。さらに、自分たちが百韻において句を詠むべき場所、そして句数をいつも決めていた。これは、いわゆる「分句」を意識したものであり、彼らが座をコントロールして連歌会の迅速化をはかっていたと考えられる。どの場所の句を連歌師が詠むべきかという問題は、近世の俳諧における花の句や月の句の定座を成立させることに繋がった。紹巴たちが、花の句を詠むための前句、つまり後に言う花や月の呼び出しの句を詠む場合も多く見られた。
紹巴自身の連歌の特徴としては、会席で誰もが理解できる句を詠むようにし、転じ方が曖昧な、連歌に堪能ではない者の句には、その句の内容を補足するといった詠みぶりが窺えた。前の句を引き立たせるように、関連する内容でより具体的な句を付ける手法も目立った。紹巴が連歌の当座性を重視し、自身の句の芸術性を求めるよりも連衆を楽しませるよう努めていたと言えるのである。
紹巴の座は、「連歌は古歌、古き文など余多見侍ねば及びがたきと見えたり。誹諧は一文不通の人もなることにや」（天水抄）と説明される後の俳諧好士出現の土壌を耕した。古典知識のない人の補佐に徹した紹巴たちの百韻では、初心者や未熟な者であっても連歌を楽しむことができた。これが連歌人口の増加に繋がり、日常の言葉で句を詠んでもよいという風潮が後の俳諧を生んだと言える。このことは紹巴の大きな功績と指摘できよう。本研究でこの時代の連歌が俳諧に大きな影響を与えたことが判明したのである。
本研究を推敲するにあたり、調査を許可して下さった各研究機関に心より御礼を申し上げる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　6件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>松本麻子 | ４．巻<br>第31号 |
| ２．論文標題<br>発句論 ―17 世紀前半までの発句の変遷について― | ５．発行年<br>2021年 |
| ３．雑誌名<br>聖徳大学研究紀要 | ６．最初と最後の頁<br>57－63 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>松本麻子 | ４．巻<br>第1号(通巻第34号) |
| ２．論文標題<br>国立公文書館内閣文庫蔵『百韻連歌集』の翻刻と解説（三） | ５．発行年<br>2021年 |
| ３．雑誌名<br>医療創生大学研究紀要 | ６．最初と最後の頁<br>1－16 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>松本麻子 | ４．巻<br>5 |
| ２．論文標題<br>国立公文書館内閣文庫蔵『百韻連歌集』の翻刻と解説（一） | ５．発行年<br>2020年 |
| ３．雑誌名<br>医療創生大学研究紀要　人文学・社会科学・情報学篇 | ６．最初と最後の頁<br>1－34 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>松本麻子 | ４．巻<br>17 |
| ２．論文標題<br>国立公文書館内閣文庫蔵『百韻連歌集』の翻刻と解説（二） | ５．発行年<br>2020年 |
| ３．雑誌名<br>医療創生大学大学院人文学研究科紀要 | ６．最初と最後の頁<br>1－19 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>松本麻子 | 4．巻<br>第８号 |
| 2．論文標題<br>紹巴連歌の特長 | 5．発行年<br>2018年 |
| 3．雑誌名<br>日本文学研究ジャーナル | 6．最初と最後の頁<br>pp.46～58 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>松本麻子 | 4．巻<br>第4号 |
| 2．論文標題<br>「肥前島原松平文庫蔵『石山世尊院千句』の翻刻と解説」 | 5．発行年<br>2018年 |
| 3．雑誌名<br>いわき明星大学研究紀要　人文学・社会科学・情報学篇 | 6．最初と最後の頁<br>pp.1～ 18 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>松本麻子 | 4．巻<br>第19号 |
| 2．論文標題<br>肥前島原松平文庫蔵『文禄五年九月四日千句』の翻刻と解説 | 5．発行年<br>2021年 |
| 3．雑誌名<br>聖徳大学大学院言語文化学会　言語文化研究 | 6．最初と最後の頁<br>pp.39～68 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>吉田健一　松本麻子 | 4．巻<br>第16号 |
| 2．論文標題<br>『桜川』注釈（四） | 5．発行年<br>2019年 |
| 3．雑誌名<br>いわき明星大学人文学研究科紀要 | 6．最初と最後の頁<br>pp.162～180 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>松本麻子 |
| ２．発表標題<br>読まれる連歌と詠む連歌ー紹巴の百韻から考えるー |
| ３．学会等名<br>中世文学会 |
| ４．発表年<br>2022年 |

〔図書〕　計1件

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>松本麻子 | ４．発行年<br>2018年 |
| ２．出版社<br>勉誠出版 | ５．総ページ数<br>515ページ |
| ３．書名<br>『画期としての室町―政事･宗教・古典』　「千句連歌における「人の耳をもおどろかす」句」 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---|---|